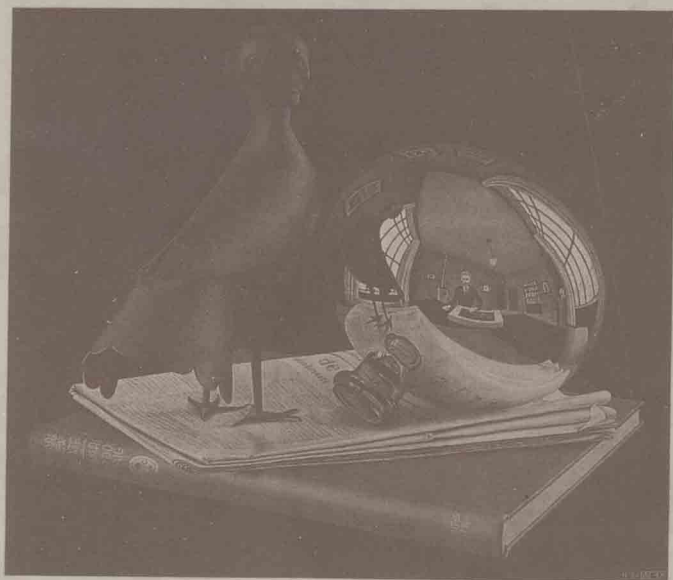


F.シュタンツェル

物語の構造

〈語り〉の理論とテキスト分析

前田 彰 一 訳



岩波書店

F. シュタンツェル

物語の構造

〈語り〉の理論とテキスト分析

前田 彰一 訳

岩波書店

物語の構造

一九八九年一月三〇日 第一刷発行 ©
一九八九年四月五日 第二刷発行

定価五二〇〇円
(本体五〇四九円)

訳者 前田 彰一
まえ だ しょう いち

発行者 緑川 亨
りょく かわ へい

〒101 東京都千代田区一ツ橋二一五
発行所 株式会社 岩波書店
いんぎょ さん

電話 〇三二六五四二二
振替 東京六三三〇

印刷・法令印刷 製本・松本製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-002279-2

凡 例

一、原著の第二章「媒介性のゼロ段階——梗概、章の見出し、草案」は、紙数の都合により、原著者及び出版社の諒解を得て、割愛した。

一、人称、遠近法、叙法ならびに物語り状況といった主要なキーワードは、訳文ではへで、またそれらの下位概念に当たるといえば、局外の語り手、物語る私、などのキーワードは、へで括った。

一、原著における引用記号は、訳文では「」を用いて表記した。同じくイタリック体は、訳文では傍点を用いて表記した。

前者の場合、キーワードに関しては、訳文上での表記の統一を優先した。

一、引用文における原著者の補足は、原著同様、「」で括った。

一、訳者による補足ないし簡単な注は、「」で括った。

一、原著の文献一覧のうち、一次文献は「作品名索引」として、また二次文献は「参考文献」として独立させた。なお作品名索引は、作家ごとに配列した。

一、原著の事項索引のうち、一部の項目を割愛した。

目次

凡 例 (v)

まえがき (1)

序 論 3

第Ⅰ章 物語のジャンル特性としての媒介性 7

1 媒介性と「視点 Point of View」(13)

2 媒介性と語り手なる人物 (15)

第Ⅱ章 典型的な物語り状況——新たな定義の試み 29

1 典型的な物語り状況の構成要素——人称、遠近法、叙法 (30)

1の(1) 対立Ⅰ(人称)——一人称形式の語り／三人称形式の語り (40)

1の(2) 対立Ⅱ(遠近法)——内的遠近法／外的遠近法 (42)

1の(3) 対立Ⅲ(叙法)——語り手／映し手 (43)

1の(4) 類型円図表(円環式類型図表) (44)

2 物語り状況の動態化(47)

2の(1) 語りのプロフィール(51)

2の(2) 語りのリズム(53)

3 物語プロセスの型式主義化——語りのパターン化(59)

4 動態化と型式主義化——要約(62)

第三章 対立「人称」——語り手の存在領域と作中人物の存在領域の一致／不一致(一人称による対象指示／三人称による対象指示)

対象指示

1 W・カイザー、W・C・ブースなどにおける一人称小説と三人称小説に関する論議(66)

2 実作品による例証(70)

3 一人称小説と三人称小説の映画化(72)

4 対立「人称」(一人称／三人称)の物語理論による新たな基礎づけの試み(75)

5 一人称小説と三人称小説における時間・空間指示機能(80)

6 語り手の「肉体性」と語りの動機づけ(81)

7 作品解釈のための幾つかの結論(83)

8 人称代名詞(一人称／三人称)による対象指示の交替(89)

- 8 の(1) 『ヘンリー・エズモンド』における人称代名詞(一人称／三人称)の入れ替わり(90)
- 8 の(2) 現代小説における人称(一人称／三人称)の交替——『ハーツォグ』、『わが名はガンテンバイン』、『モントーク』の場合(95)

第Ⅳ章 対立「遠近法」——内的遠近法／外的遠近法……………103

- 1 対立「遠近法」と対立「人称」の関係(103)
- 2 遠近法と空間の描写(108)
- 2 の(1) 物語における空間描写の二つのモデル(111)
- 3 遠近法主義／非遠近法主義——その歴史的次元(117)
- 4 内的遠近法／外的遠近法(121)
- 4 の(1) 内面世界の描写(122)
- 4 の(2) 内的遠近法と外的遠近法の境界づけの問題(126)
- 4 の(3) ディッケンズにおける潜在意識的遠近法化(133)

第Ⅴ章 対立「叙法」——語り手の人物／映し手の人物……………139

- 1 語り手の人物、映し手の人物、および両者の中間形態(144)
- 1 の(1) 語り手の信頼性(148)
- 2 対立「叙法」と「不確定個所」(R・インガルデン)(150)
- 3 物語の序幕における語り手と映し手(153)

3の(1) 「イーミックな」テキストの書き出しと「エティックな」テキストの書き出し——テキスト言語学によるそれらの区別(162)

4 キャサリン・マンズフィールド、ジェイムズ・ジョイス、トーマス・マンにおける語り手の作中人物化(167)

4の(1) キャサリン・マンズフィールド、『園遊会』(169)

4の(2) ジェイムズ・ジョイス、『ユリシーズ』(172)

4の(3) トーマス・マン、『魔の山』(178)

4の(4) トーマス・マンの『トリスタン』における語り状況——テキスト言語学的並びに物語理論的観点からの比較検討(180)

第Ⅵ章 類型円図表——図式と機能

1 局外の語り手による物語り状況から作中人物に反映する物語り状況へ(189)

1の(1) 人格化された語り手の後退(189)

1の(2) 局外の語り手による対話の演出(190)

1の(3) 名詞から代名詞へ(191)

1の(4) 局外の語り手による物語り状況から作中人物に反映する物語り状況への移行態としての体験話法(193)

1の(5) 作中人物の言葉が語り手の言葉に「感染」する現象(194)

1の(6) 語り手の言葉と作中人物の言葉の差異化(196)

1の(7) 語り手の言葉の口語化(197)

1 の (8)	局外の語り手による語りと作中人物に反映する語りとの境界確定問題 (19)
1 の (9)	体験話法から作中人物に反映する物語り状況へ (201)
1 の (10)	局外の語り手による語りから作中人物に反映する語りへの 連続体、並びに作中人物化された語り手 (201)
2	局外の語り手による物語り状況から「私」の語る物語り状況へ (204)
2 の (1)	ブンバーニッケルに姿を現わす局外の語り手 (205)
2 の (2)	周縁的な一人称の語り手 (209)
2 の (3)	自叙伝風一人称小説から内的独白へ (213)
2 の (4)	自叙伝風(一人称形式)の物語り状況における二つの「私」の関係 (216)
2 の (5)	一人称小説における「視点」と回想 (218)
2 の (6)	「私」の語る物語り状況と体験話法 (223)
3	「私」の語る物語り状況から作中人物に反映する物語り状況へ (230)
3 の (1)	一人称形式における死 (234)
3 の (2)	「カメラ・アイ」 (238)
4	結 び (243)
注 (245)	
訳者あとがき (279)	

参考文献	(19)
人名索引	(14)
事項索引	(9)
作品名索引	(1)

まえがき

私が典型的な『物語り状況』の理論を討議の場にのせてから、四半世紀が過ぎ去った。その最初の反響としては、さしあたりごく短期間、その理論をめぐって批判的論議が行き交うことが期待されるぐらいであった。ところが十年余を経て私は、『物語り状況』という概念が、小説批評と物語研究のいわば「使い慣れた言葉」になりつつあることを知った。ここ数年來、私の理論に対する賛否両論は共に数を増し、その双方の論拠も、目立って重要性を加えてきたのである。

トーマス・ハーディは、自分の小説『デス』に対する思いがけぬ大きな反響を前にして、「自作の成功が予め分かっていたら、私は本当に立派な小説を書くべく努めただろう」と述べたといわれる。小説家と対照的に、小説批評家は、過去におかした誤りを正し、後から得た認識を補い、討議と研究の新しい成果を盛り込んで調整をはかれる、という有利な立場にいる。本書も、根本的にはそのような努力の積み重ねである。そうした折に私を批判してくれた人々や、また、私の理論的試みを追い続け、個々の物語作品の研究と解釈に私の理論を応用し、その概念的骨組みを典拠と実例で肉付けしてくれた人々に対して、私がどれほど深い感謝

の気持を抱いているかは、私の付した注釈から読み取っていただけるものと思う。

もう一つの非常に重要な条件、すなわち、語りの新しい理論を、一九五五年刊の『物語り状況』に関する古い類型論よりも、さらに浩瀚なテキスト資料に基づいて構築するために必要な条件を作り出してくれたのは、グラーツ大学の私の聴講生たちであった。彼らは、演習のレポートや卒業論文において、必要な資料のかなりな量を分析し、理論の展開にとつて、非常に実り豊かな着想の数々を提供してくれたのであった。グラーツ大学英語文学研究室の同僚諸兄にも、その蒙った幾多の示唆に対し、感謝しなければならぬ。イングリット・ブーフエッガー嬢は、無数の書誌学的疑問の解明、および原稿と校正刷りの校正の際の、たゆまざる専門的助力によつて、この研究が印刷にこぎつけるまで多大の貢献をしてくれた。ゲールリンデ・ヘルフス夫人には、改稿のたびに原稿をタイプで打ってもらったが、類型円図表のように「円い形に」タイプを打たなければならないときも、夫人はいつも根気よく仕事を続けてくれた。

終わりに、読者のために一言述べておきたい。私の物語理論の基本をなす思考過程は、第一章「物語のジャンル特性としての媒介性」、第二章「典型的な物語り状況——新たな定義の試み」、および第Ⅵ章「類型円図表——図式と機能」に詳述されている。それゆえ、本書を短縮して読む場合には、特にこの三章を集中的に

読まれるとよいだろう。英語圏の読者には、本書のもっとも重要な思考過程の要約を含む論考『小説における典型的な物語り状況』再考——「小説の文法」のために〔Novel: A Forum on Fiction〕[Spring 1978, 247-266]に注意を促しておきたい。目的に適合と思われる場合には可能なかぎり、テキスト例は、入手しやすいポケット版ないしペーパーバック版から引用した。

一九七八年八月、ホーエ・ズルツにて

F・K・シュタンツェル

第二版(一九八二年)まえがき

新しい版は、私に構成要素(遠近法)の定義を新たに表現し直す機会を与えてくれた。私がそれを思い立ったのは、とりわけドリット・コーンの本書に対する書評「語りの包囲——フランツ・シュタンツェルの『物語の理論』について」〔Poetics Today 2〔1981, 157-182〕〕によってである。私の理論とジェラルド・シュネットの『物語のディスクール(フィギュールⅢ)』との綿密な比較を含み、しかも物語理論の討議にとって非常に重要なドリット・コーンのこの論文を詳しく扱うのは、紙数の都合で別の機会にゆずらねば

ならない。

新しい版のテキストでは、初版における幾つかの誤りが訂正された。さらに専門文献について、初版の後刊行されたものや、私が今回初めて知ったものを、巻末の付録に追加することができた。本書の英語による翻訳が、ほぼ一年以内にケンブリッジ大学出版局から刊行される。

哲学修士イングリット・ブーフエッガー女史の校正、並びに索引の改訂に際しての誠実なる協力に対し、私は再び感謝の言葉を述べなければならない。

F・K・シュタンツェル

第三版(一九八五年)まえがき

若干の誤りが訂正されたほかは、いかなる変更も加えられていない。英語による翻訳は、一九八四年、『物語の理論』(A Theory of Narrative)としてケンブリッジ大学出版局から刊行された。

F・K・シュタンツェル

序論

……だがさしあたり私は、シェイクスピアとスピノザの後で私に最大の影響を与えたのはリンネであること、しかも、こともあろうに彼によって挑まれた抗争を通してであることを、告白しておきたい。私が彼の鋭利にして才氣溢れる区別を、その的確で目的に適った、だが往々にして恣意的な法則を容認しようと努めるうちに、私の心中には葛藤が生まれてきた。というのも、彼が無理やり区別しようとするものが、私の本性のもっとも内奥の欲求にしたがい、合一をめざさずにはおかなかったからである。

(ゲーテ「私の植物学研究の歴史」)

序論
一九五五年に『小説における典型的な物語り状況』が世に出たとき、物語研究はまだリンネ時代の段階にとどまっていた。中心を占めていたものは、語りの種類を分類し、できるだけ明確な術語を導入して、一定の秩序を確立しようとする努力であった。これは、物語形式の多様さと豊かさに見通しを与え、体系的な理論を適用するために必要な秩序であった。同時に、世紀転換期以来、ますますひんばんに駆使されるようになった物語様式(たとえば

それは、『作中人物に反映する物語り状況』、内的独白、断片化などの傾向によって特徴づけられる)を、小説理論の立場から正當に評価することも重要な事柄であった。というのも、そのような革新に対する旧世代の批評家や理論家の否定的評価が、一九五〇年代にも依然として(散発的ではあるにしても)、支持されること(1)があったからである。

訳注1(『小説における典型的な物語り状況』 シュタンツェ

ルが、『トム・ジョーンズ』、『白鯨』、『使者たち』、『ユリ
シイズ』などの作品を手掛かりに、初めて『物語り状況』な
る概念を提案した彼の主著の一つ。

こうした目標が達成されると、物語研究は、今や新しい問題に
立ち向かうことができるようになった。それらの新しい問題は、
部分的には他の専門分野(言語学、テクスト学、コミュニケーション
理論など)から提起されるものであって、まさにこの点に、
決定的な変化の兆しがあるのである。比較的新しい文献目
録、たとえばヴォルフガング・ハウブリクスが一九七六年に編集
した『物語研究 第一巻』に添えられた「物語研究主要文献目
録」をのぞいてみると、一九五五年当時はまだ全然確立されてい
なかった専門分野や、あるいは文芸学となんら関わりを持ってい
なかった専門分野の論文が、今日すでに物語研究の重要な部分を
なしていることが分かる。物語理論の全領域に及ぶこれまでの成
果を、手ごろな一冊の本に集約することは、右のような理由から
もはや不可能である。

本論考はそれゆえ、論すべき問題を大幅に切り詰めなくとも、
おそらく達成できるような一つの限定された目標を掲げている。
それは根本的には、一九五五年に書かれた『物語り状況』の理論に
基づいて、物語様式の類型論をさらに展開させ、精密化すること
である。上述したように、物語研究が拡大した結果として、『小
説における典型的な物語り状況』と『小説の典型的な形式』の二

著に対する賛否ともこの反響が、文芸学以外の幾つかの領域で
も、すなわちテクスト言語学、^{リシオン・イテラティブ・リシオン}「言語学的批評」、コミュニケーション
理論などの領域でも、耳に入るのである。それゆえ本論
考は、予定された制約にもかかわらず、上述の分野の成果や論拠
にも言及せざるをえないであろう。拙著『小説における典型的な
物語り状況』に対する反応のこうした拡散化こそ、一九五五年当
時はまだ本質的に小説理論の関心事であった事柄が、ここ二、三
十年來、しだいに文芸学の枠をふみ越え始めたことを物語ってい
る。

したがって新しい研究状況は、問題領域に関して、繩張り意識
のない開放性によって特徴づけられる。物語理論の個別的問題の
どれ一つをとっても、われわれの文化の精神状況の全般の問題と、
たいてい何らかの関連をもっているように思われる。そういう意
味で今日、文学が、殊に物語芸術作品が、そもそも体系的理論の
介入によって意のままに扱えるかどうかという問題は、もはや純
文芸学的な問題として出てくるのではなく、われわれの文化の精
神的・社会的現状を把握せんとする全般的な努力の一環に関わる
問題として、現われてくるのである。ユーリイ・ロートマンとそ
の僚友たちが、「文化」の機能を「秩序あるものが無規律なるも
のの領域に対して仕掛ける攻撃」⁽³⁾として解するとき、またウンベ
ルト・エーコが、自らの構想になる記号論の目標として「文化の
論理学」を掲げるとき、⁽⁴⁾語りの最も重要な要素とその構造的な連

関を体系的に記述しようとする物語理論の試みが組み込まれるべき、より大きな座標系がそこに垣間見えてくるであろう。

物語に関わる問題の「学際性」は、研究対象の認識可能な切り子面の数を増加させたばかりでなく、物語テキストの分析に用いられる手段の洗練化をももたらした。研究上の概念が精緻化すればするほど、——これはすべての研究に妥当する一般の経験である——認識可能な形態と現象の数が増えるばかりでなく、その多様性、変動性も増大する。これを一九五五年に発表した「典型的な物語り状況」という概念にあてはめて言えば、もしわれわれがそれらの概念の機能能力を維持させたいならば、物語研究の最近の認識に照らして、それらの概念は修正されなければならないということになる。

最も重要な物語様式を、初めての試みとして、包括的かつ体系的な図式にまとめあげるといふ本来の目標が達成された現在、われわれは個々の物語作品の「扱いにくさ」を従来にもまして適切に処理し、物語理論を今一步物語テキストのリアリティーに近づけるという試みに、ようやく着手できるのである。従来は、どちらかといえば理念型としての《物語り状況》の叙述に重点が置かれ、類型円図表からもそれとなく読み取れるような多彩な物語様式、つまり、さまざまな物語様式の変幻自在な中間形態とか混合形態の記述については、これがないがしろにしてきたのであった。しかし、本書の最も重要な研究上の狙いは、典型的な《物語り状況》

という概念を動態化し、精緻化する試みなのである。

本書の考察が進むにつれて、——ここで先回りして言うておくが——物語理論を、形態と作品の粗雑な分類からできるだけ遠ざけようとする努力の陰から、一見したところそれと逆方向の趨勢が、ほの見えてくるだろう。すなわち、個々の物語作品の「扱いにくさ」といううわべの陰から、個々の作品の枠を越えて広がる呼応関係、連繫、分類体系、構造モデルといったものを暗示する輪郭が、新たに浮かび上がり始めるのである。これはもとより、近年の文芸学並びに言語学を、他の方法論にもまして強く規定している構造主義的考察方法の所産なのである。いちだんと厳密に形式化された新しい図案による類型円図表(後見返しの図表参照)は、語りの構造に基づくそのような関連、対応関係、隣接関係を、具体的に理解するためのよすがとなるだろう。

第Ⅰ章 物語のジャンル特性としての媒介性

定義により、物語芸術は、筋書と語り手を必要とする。

(スコールズ／ケロッグ『物語の本質』)

ある報告が伝えられたり、報じられたり、語られたりする場合、そこには媒介者が存在する。すなわち、われわれは語り手の声を耳にするのである。このことは、つとに旧来の小説理論によっても、物語文学を特に劇文学から区別する際のジャンル特性として認められてきた。その場合、「語り手」という媒介者が情報を「間接的に提示する物語と、直接的に提示する演劇とを比較することによって、論点はほぼ次の問題、すなわち人格化された語り手の存在は——語りの媒介性^{訳注2}はもっぱらこの語り手の存在によって認識される——読者の自由な幻想の戯れを妨げるかどうかという問題に絞られたのであった。

フリードリヒ・シュビールハーゲンとその門弟たちが客観性を要請したこと、すなわち小説においてさえも描写の直接性を要請

したことに對しては、一九一〇年にすでにケーテ・フリーデマンが、語りを媒介にした描写は(演劇に較べて)決して二流の手法ではなく、一般にわれわれの現実経験に類似したある種の表現形式であると述べて、異議を申し立てたのであった。——「語り手」は、評価し、感じ、見る者である。「語り手」は、カント以来われわれの熟知する認識上の見解、すなわち、われわれは世界をそれ自体あるがままにではなく、観察する精神の媒体を通して見えるがままに把握するという見解を、象徴する存在である。観察する精神を通して、われわれに見える事象世界は、主観と客観に分離する⁽²⁾。」

訳注2(語りの媒介性) 演劇が、会話や演技によって、観客の目や耳に向かって直接的に提示する形式であるのに対し、